

## 人間的世界と人称概念としての「私」

鬼界彰夫

筑波大学人文社会科学研究所

### <人称概念としての「私」>

「私」とは、それを理解し使用できる人は（現実には）必ず「あなた」という概念・言葉も理解し使用できるという意味で「あなた」と対を成す概念である。加えて、「私」がどんなもの（「私」で有ることがどんなこと）か知っていることは、「あなた」が「あなた」からすればもう一人の「私」であり、「私」が「あなた」からすれば「あなた」として目の前に存在していることを知っていることであるという意味で、「あなた」と深く内在的に結びついており、その意味で「あなた」と内在相関的である。加えて「私」と「あなた」の間には、それぞれの人間にとって、例えば、「私は痛い」と「あなたが痛い」とは全く異なる事態として体験されると同時に、にもかかわらずそれらを「痛み」という同一概念（感覚概念）の下に把握するという非対称的相補性が存在する。このように「私」と「あなた」は深く相関した不可分な概念であり、そうしたものとして現にわれわれが持つそれらの概念をここで人称概念と呼びたい。

### <「私」と人間的世界>

人称概念としての「私」（およびそれと対になった「あなた」）とは、われわれ人間が自分と他の人間を人間として把握し、そのことにおいて/によって自身が人間として有り、他の人間と「人と人」として係わり合っゆく際の、根本的な存在様式、自己認知様式、相互認知様式である。われわれは、自分を「私」と捉え、他人を「あなた」と捉え、その上で自分と相手の間に「人と人」という関係を築くのではなく、自分を（「これ」でなく）「私」と捉えたとき、すでにそのことにおいて潜在的に他の人間を（「あれ」や「それ」ではない）「あなた」と捉えているのであり、そのように自分と相手を「私」－「あなた」と捉えたとき、それらの概念の上述のような内在的諸特性により、常にすでに自分と相手を人間的関係により結びつけつつ存在しているのである。この人間的関係はその根本において、人と人が面と向かって言葉を交わすという関係であり、自分を「私」と名乗り、相手に「あなた」と呼びかけ、言葉を介して互いに何かを為しあうという関係である。この関係の中から、「依頼」、「約束」、「合意」、「伝達」、「感謝」、「謝罪」といったより複雑な人間的関係（行為）が生まれ、そこからさまざまな形態の社会・組織が生まれる。それゆえこの原初的な人間的関係とそれを生み出す人称概念は、あらゆる形態の人間社会（文化）の母胎・土壌であり、われわれが日々人間として暮らす世界としての人間的世界の概念的岩盤と呼ぶことのできるものである。それは何かを「対象」として観察したり、操作したりする関係とは根本的に異なる関係であり、われわれ人間が他の人間とのみ結びうる関係、われわれと動物や物や道具や機械との間には存在しえない関係である（もちろん動物と他のケース

の間には重要な差が存在する、われわれは動物と言葉を交わさないが、彼らの痛みに同情する)。

<人称概念としての「私」と「あなた」の諸特質>

同時に「私」と「あなた」を中心とした人称概念（そこには「心」と「行為」という根本概念が奥深く編み込まれている）は、われわれが現実に人間として存在し、互いに関わりあうことのできる唯一の概念形式である。そしてわれわれ一人ひとりの人間がこの世界で現実に生きてゆく唯一の方法は他の人間と関わりあいながら生計を立てることであるから、「私」（そして「あなた」）とはわれわれが生きてゆくことのできる唯一のあり方であり、自分の捉え方であり、他の人間の捉え方である。それはわれわれが前概念的素材としての生物（ホモサピエンス）から「人間」という存在をこしらえるためのテクノロジーではなく、人間というわれわれの存在そのものである。それゆえ古いテクノロジーを廃棄し、新しいテクノロジーを創出することはできても、現にわれわれが持つこの人称概念（「私」－「あなた」）を廃棄して、別の概念系を創出することは、われわれが人間であることをやめない限りできない。「私」と「あなた」とはわれわれが人間として生きてゆくことのできる唯一の形なのである。このことは人称概念がわれわれ人間に先立つ（最も強い意味で）自然発生的なものであることに起因する。われわれが人間として自らを意識し、言葉を交わし始めたとき、われわれはすでに「私」と「あなた」として存在していたのである。こうした起源に起因する人称概念のもう一つの特徴は、それが「不完全」であるということである。すなわち人為的な法制度上の諸概念や学術理論的諸概念のように、それはあらゆる局面において厳密に定義されてはいない。なぜならそれは人がさまざまな思惑に駆られてこしらえた概念ではないからである。それはわれわれが現に人間として互いに関わりながら生きてゆくうえで必要な限りにおいては限定されているが、そこからはみ出した仮想的局面については全く無規定である（例えば「私」、人間の形而上学的同一性について）。言うまでもなくこのことは人称概念の「欠点」ではなく、その根源性、超人為性、代理不可能性を示す「証し」であり、「誉れ」とみなされるべきものであると私は考える。